

# 庭木などの冬囲い

原 秀 雄

朝ごとに霜が白く、吹く風も物のあわれを思わせ、山の頂から木の葉、草の葉が漸く色づいて麓に及び、また頂に白いものを見るようになる、いよいよ冬に一歩入つて、庭の木にも冬の用意が急がれるようになる。雪の少ない地方でも時に雪に就ての考慮が必要なことがあり、まして雪の多い地方では先ず雪に木をまげられたり、折られたりせぬような注意が必要である。寒さに強い木には単にそれだけの注意で足りるが、寒さに少しでも弱いものには、その上防寒に心を配る必要がある。

従来しばしばこれについて記し、また記されたところも多いが、古く貝原益軒翁の花譜巻之上に『風木の寒をおそるる物。冬初其根にあつく土をかふべし。馬糞をおくもよし。又こもにて木のまはりをつつむへし』とあるが雪の深い地方では如何にするか、以下少しく庭木などの冬囲いについて記してみよう。

(1)耐寒性の強い庭木の冬囲い 冬戸外で十分越冬する樹木の成木で、枝も十分に積雪の上に出るような喬木は冬囲いの必要はない。ただ枝が積雪の重さで折れやすいもの、例えばマツのようなものでは、幹に添えて丈夫な丸太を立て、その頂から多数の縄を

下げ、それで枝を釣るようにする。また雪の下に埋まるような下枝は、幹にくくり、または幹から縄でつるようにするとよい。また将来は喬大になるものでも幹がまだ細く、あるいは低いもの、及びイチイ(オンコン)の刈込もの、シヤクナゲやツツジの類、ユキヤナギ、シモツケ類などのような灌木は雪の下に埋められたり、吹雪や屋根から落ちる雪で曲げられ、埋められて傷むおそれのあるものは、木の大小に応じて株の丈よりやや高い位の丸太や竹を株の周囲に立て、頂を一所によせて円錐形に組み、その頂を丈夫に束ね、丸太や竹を互に縄でつづり、雪におされて竹と竹、あるいは丸太と竹との間が開いたり、雪が直接囲下の枝を押し潰さぬようにする。桜、梅、白樺、カエデ類、ナナカマドなど喬木の幼木は、細い丸太や竹を幹にそえて立て、これに幹を結びつけてもよい。灌木でも丈が高くなり幹も太くなつたものは、縄で枝を束ねるようにしぼつておくだけで十分である。このように縄でしばつたものは、縄が雪の重さですり落ちぬようにせぬと、弱い細い枝はもとより、相当丈夫と思われるほどの枝や幹でも、繩諸共圧されて折れた曲がることがあるから、この点注意を要する。

(2)半耐寒性の庭木の冬囲い アジサイ、各種のバラ類などは、冬温室や地室に入れるほどの心要はないが、戸外にそのままでは枯れることがある。アジサイにもバラにも寒地に自生の種類があり、それらは寒さにも強いが、少し南方のもの系統の品種や種類は、寒さに弱いのが当然である。アジサイは冬囲いなしでも地下部は枯れることなく、翌春立派に枝を出す、今年株から立たずに翌年花をもつ種類であるから、今年の枝を大切に越冬させねばならぬ。それにはまず枝を縄で束ね、株の囲りに竹を五寸間位に立てて竹の頂を固く結び、竹と竹とを縄で幾段にもつづり、先ず雪に折られぬようにすることは耐寒性の灌木と同じであるが、さらにその上から箆を巻きつけておく。次にバラには品種がすこぶる多く、一九五二年に刊行されたモダン・ローゼス(Mobarn Roses)という書の第四版には、六千からの品種が載せてあり、またそれらの品種は六十余りの系統にまとめ得るが、一つの系統にもいろいろの野生品、栽培品の血が流れている。それで同一系統のバラでも品種毎に耐寒力に差があつて複雑であるが、先ず大体ノイバラ系の蔓バラ(葉に照がない)やハマナス系のバラは最も寒さに強く、雪に折れないようにするだけでよいがテリハノイバラ系の蔓バラ(葉に照がある)その他いろいろな叢生のバラには半耐寒性のものがある。即ち蔓バラは支柱などから枝を外して蔓茎を地上に横たえ、これがね上らぬように板などで押さえておけばよい。これら蔓バラの類は何れも今

年株から出た長枝に翌年短枝を生じ、その頂に花をつけるので、今年株から出た長い枝は特に大切にせねばならぬ。即ち雪から外に出た枝の先などは枯れるから、全枝を雪の下にするのである。雪が植物体を覆うことはよい防寒となるもので、寒さに強い筈の高山植物などでも、冬風当りが強くて常に積雪が吹きはらわれるような場所にあるハイマツなどの枝がその部分だけ枯れているのを見るが、このことから積雪が如何に防寒に効があるかを知ることができる。またこのような例は冬季われわれの身辺到るところにいろいろ見ることが出来る。また叢生のバラは枝をまとめてその外に竹を添え縄で束ねることはアジサイと同じであるが、根元に土をよせ、または枯葉をよせ竹囲の上から箆で巻くのである。

(3)庭木の冬囲いの時期 庭木の冬囲いを始める時期には多少の問題があつて、あまり早すぎると遅すぎるとも具合が悪い。即ち落葉木が未だ葉を落さぬ十月初めから冬囲いをする、囲いの中でむれる(一種の酸酵)ことがあり、また害虫の越冬場を作ることもあるからである。つまり適期は葉が落ちてからといえるが、一方各樹木共一斉に葉を落とすとは限らぬから、なるべく葉の落ちたものから冬囲いにかかるがよい。アジサイやバラは中々葉の落ちぬものではあるが、十一月も末になると雪も降り、寒くもなり、作業が容易でないから、必ずしも葉がみな落ちるのを待つ必要はない。大体の時期として札幌附近で十月末から十一月中頃までといえる。

(4) 各圃いの取外し

次に庭木の冬囲いを取り外すときの注意である。これは添竹を施した丸太や竹で囲んだだけのものでは、春雪がとけ出したあまり降りることなく、春雪がとけ出したあまり降りることがなくなつたならば、直ぐ取除いて差支えないし、美観上からも必要である。しかし筵などで巻いた、多少共防寒的意義をもつ冬囲いでは強い霜のなくなるまで外すことができない。若し早く取除くと霜に傷められることが多いからである。それでその時期は大體四月二十日すぎということになり、その年の状態で三、四日加減を要することもあり得る。(札幌近郊)

(5) その他上に書き記したことをさらに

補うと、先ず如何に丁寧に冬囲いをして、時に枝が折れたり、稚木では幹が曲つたり、折れたり、裂けたりすることがある。その傷の大きいものは剪り去るより法がないが、折れまたは裂けの軽いもので傷口の乾いていないもの、あるいは曲つたものは、傷口をよく合わせて副木を幹枝の太さに応じて二、三本または数本当て、その上を縄などで巻き、風でゆれぬようにしておく、自然に傷口が癒着してくる。大切な枝などが傷ついた場合には、時をうつつきずこの方法で治すことよい。副木はその年一杯位はつけたままにすることが必要である。

次に盆栽の冬囲いであるが、これは茎枝を傷めぬようにすることも、鉢の割れを防ぐ必要がある。それで先ず生垣の北側など春のなるべく晩い場所を選び、鉢の深さに地面を掘り、これに鉢の部分を直径三、四尺の円形の内に並べて埋め、その外側に五寸おきくらいに竹を立てて囲こみ、頂を束ねて竹と竹とを縄でつづること耐寒性の灌木と同じにして、木の折れぬようにする。

鉢は深く埋める必要はなく、また深く埋めては根の生育を害し、切角美しくついた癖を枯らしたりすることがあるから、鉢すれすれに埋めるに止める。鉢植にした高山植物とか山草の類も、この要領で鉢だけを土に埋て越冬せしめるのが最も安全で、雪消えの遅い場所を選んで鉢を埋めるのは、春先の寒い外気にできるだけおれさせぬようにするためである。高山植物や山草では竹を立てる必要はない。盆栽でも山草でも鉢数の多いときには三、四尺幅の長方形の場所に鉢を埋め、盆栽では竹を屋根形に立て、棟に当たるところに一間か三尺おきに丸太を立てて補強する。

またバラの鉢種などは枝を束ね、鉢のまま又は鉢から抜いて全体を斜にして根部を埋め、ちよつと木の種苗を冬囲いのためにまとめて斜植しておくのと同じような方法で越冬させるとよい。

次に草物で地上の茎葉の枯れるものは刈り除き、茎葉は堆肥などにし、庭をきれい

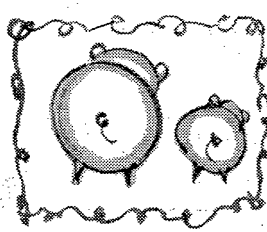
にしておくと共に、ローン(芝生)の落葉はかき集めて、これも堆肥などに堆むようにする。またローンの落葉をそのままにして冬を越した場合には、春早く落葉をかき集めて、ローングラスの葉に十分日光の当るようにせねばならない。

△ ○ △ ○

追記

本誌第二巻第四号(本年四月号)の筆者の『草花二つ三つ』の中の十二頁二段目『立葵』の記文中『わが国には万葉集にその名を見るほど古く伝来』と記したが、向井博士(本草学論攷)によるとアフリ(アオイ)は今のフユアオイで和名抄に阿布比、また本草和名に冬葵子和名阿布比

乃美とあるものがこれであり、立葵即ち蜀葵は万葉時代には未渡米の植物で和本本草に初めてこの植物の名を見ると言い、万葉



上野幌育種場便り

本年は不幸にも春からの予想が適中して、低温による作物の生育遅延に加え、秋の数次に亘

る台風の影響に各地の農家の皆様が莫大な被害をうけられたことは同じく土に生きている育種場員として心から御同情を申し上げる次第です。

なお札幌近郊の農家を見ましても夏作はどうか去年並に収穫しましたものの秋作は全くみじめなもので、つづ立つたまま白茶けた稲、台風で葉をふきちぎられ老婆の白髪のように乱れ倒れた未熟のデントコーン、さつぱり結球しない白菜、青いまままで吹きおとされた林檎……等全く考えさせられることばかりです。

当育種場でも同様、低温、台風の被害が若干ありましたが、お陰様でどうやら育種関係、原種生産関係の仕事は順調に進捗し、豌豆について新しい系統を掴みうる見込みが強く、輸入飼料作物についての調査ではドイツからの家畜ビート中に極めて優秀なものがあることが判り、また原種生産については燕麦の雪印一〇一号(R六六二〇)ライムギのベトクザ一八五、アルサイククロバー、四倍体雪印青刈大豆等の新しい系統の増殖態勢も順調でどうやら面目

集にあるアブリは今日の立葵であるとするのは牧野博士の説である。(北海道大學理學部文部教官)

を保つております。

十月も半をすぎ果樹苗木の発送根菜母本の掘取り貯蔵、生産種子の乾燥精選、各種調査、秋耕等に追われて、もう目前に迫っている積雪期にそなえております。乳牛も十頭となり、そのために準備したデントコーンのエンシレイジももう醗酵盛りを過ぎ決い香で牛達の食欲をそそり、いつ冬が来て大丈夫でしょう。この冬の間には十分本年の経験を反省し、じつくりと明年の準備をととのえ、皆様の育種場としてより良き仕事のため活躍したいと考えておりますので、相変らざる御支援を御願ひする次第です。

表紙写真は秋晴れの一日、当場のラデノクローバー採種跡に電気牧柵を設け放牧中の乳牛群です。今年の低温にかかわらずよく結実した家畜南瓜(品種ラージュボンキ)をよく御覧下さい。

牧草と園藝

第二巻第十一号 定価三十円 送料四円  
昭和二十九年十一月一日発行  
(毎月一回一日発行)

編集兼 五十嵐 清  
印刷所 三田 徳 光  
印刷所 興國印刷株式会社  
発行所 札幌 豊平町美園  
電話 雲印種苗株式會社  
札幌小樽一八二四八番